

発行元  
東京新聞  
南千住東口専売所  
TEL5850-3699  
発行責任者  
鬼塚 佳代子  
TEL090-2657-0300

# すまいるたん



第108号

平成21年

6月4日

## 大和毛織の思い出

### 赤煉瓦の青春

「モーターの音が大きくて、身振り手振りです話してました」



長江カツエさん（昭和7年生まれ）は、親子ガードの近くで生まれ、第二瑞光小↓南千住第一中学を卒業後、昭和22年から昭和32年まで大和毛織で働いていました。

戦後、大和毛織は、千住製絨所（陸軍製絨廠）から払い下げられた紡毛織物の一貫工場でも布などを作っていました。赤レンガに囲まれた敷地内で原毛洗絨（羊の毛を洗う）↓カード（毛を糸にする）↓ミニール（糸をよる 精紡）↓はた場で仕上げの工程で機械が稼動していました。機械はひとつの工程で12台近くあったと記憶されています。長江さんは、洗った羊毛を糸にする背丈より高い機械を取り扱っていました。

「隣の人がいるか確認をしてました」

機械は動き続けているので食事も交替でとりました。工場の作業は危険が伴い、

事故がないか、見回りの人が一人いました。ベルトに巻き込まれて、手を失った



人や髪を巻き込まれて怪我をした人もおり、仕事をすると髪をまとめ帽子をかぶっていました。

「茨城や栃木の人達がいきました」

長江さんの入った女子寮は二階建てで、6畳に押入れが付いた一部屋に4〜5人が住んでいました。お風呂は1階にありました。早番は午前5時〜午後2時まで、遅番は午後2時〜午後10時までと交替制でした。部屋に早番の人がいる時には、そっと気を使って暮らしていました。女子寮の塀を登つてのぞく人もいて守衛さんが守ってくれたそうです。長江さんは土曜日が早番で終わると電車で飛び乗り、群馬に嫁いだお姉さんの農作業を手伝い、寮の人達のために野菜を風呂敷に背負って戻り、月曜の遅番に出ていました。仕事は、大変だったけど、盆踊りが趣味だったので、仕事の合間にあちこちに踊りに行くのが楽しみで10年頑張つてこられたと話されていました。

昭和24年、毛織業界ではこれまで統制品になっていた原毛などが、解除されると毛布の需要が増え、ガチャンと織れば、万単位の稼ぎがあがる、いわゆる「ガチャ

万」景気となり、30年には戦前のピーク

であった最高生産高の一千万枚の水準に達し、電化製品か毛布かといわれるほどの成長製品になりました。増産に次ぐ増産で、機械や工場をどんどん増やした為、深刻な過剰生産状態を引き起こして毛布の価格はそれまでの平均の半値を切り、乱売合戦が繰り広げられました。

大和毛織も同様に業績が悪化し、工業用水として使用していた井戸の枯渇や様々な規制、労使間争議の慢性化などによって経営難に陥り、昭和35年を以って閉鎖されました。

工場跡地の一部は名古屋鉄道（名鉄）が取得し、明治村の建設用地として使用されるのが計画されていましたが、毎日大映オリオンズが昭和37年に『東京スラム』が誕生し、下町のプロ野球球場として大きな話題になりました。しかし、経営難から野球場は昭和52年に解体され、跡地は、荒川総合スポーツセンター・南千住警察署及び軟式野球用の南千住野球場に姿を変えています。

「すまいるたうんのふれあい亭」にいらした長江さんのお話から、大和毛織のことをお聞きしました。大和毛織についてご存知の方、ぜひお話を聞かせ下さいませ。